

一〇 台湾とフィリッピン

日本の最南端高雄

——高雄の何処へ行くと聞かれても、さあ、と答えるしかないから、呑気この上ない。下関を通りすぎて、船の無電室を訪ね、エスペランチストの和田義雄が朝鮮海峡の孤島で無線技手をしているのを呼び出してもらい、トンツで会話した。「イヨイヨナンボウヘイジュウデスカ。ゴゼイコウヲ、イノリマス」と打ってきた。

波もなく船酔いもせず、静かな航海がようやく黒潮で揺れだすころ、緑一色の台湾が見えてきた。基隆の波止場には高田公三が出迎えにきてくれた。それから台北の彼の家へいくと、台湾日々新聞で働いている英文工仲間が待っていた。彼等は「一体高雄なんて、台北にいてもめったに行くところじゃない。知り合ひもアテもなしで、家族総出の移住とは無謀すぎる。ここで暮す方がよい」と、口々に進めてくれたが、高田宅に三泊して汽車に乗った。やっと三日目に高雄に着いた。それは一円でバナナを買ったら床柱のような太い幹に、鈴なりになったのをくれたと

いうような、びっくりしながらの旅であった。

高雄へ着いてすぐ港に向った。荷物はみな縄が切れていて、ワレものは散々だった。水上署があったので、「東京から、台湾開発のために移住してきた。空家と、今夜泊まる所を捜している……」と大見得をきった。内地からの人間はめずらしいのか、警察は車を出して大港埔の空家へ連れていってくれた。「明日、家主をみつけて申し込めばよろしい」と、呑気なものである。高雄の夜は、九月も末というのに暑くて寝られなかった。一週間もするうちに、建て売りの新築がみつかった。四間×八間、セメント瓦ぶき、土台は総コンクリートで木は阿里山の松作り。それが二五〇〇円だ。二年払いの月賦という事で買うことにした。

高雄はもと打狗(タカオ)と名付けられた地で、日清戦争後土民の反逆に苦しめられた所だが、今は軍港になっている。しかし、別に目につく設備も無く、港の入口の左は小山で寿山というジャングル。右は旗後半島の漁村。港の奥は低い砂地で、輸入したボーキサイトでカルシュームを造っている。寿山は全山セメントの材料でアサノセメントの工場がある。港になっている海岸に人家がまばらに建っているだけで、鉄道の駅の終点の方は見渡す限り道路だけ出来上がった空地である。もともとこの辺は海だったらしく、それで大港埔(タイカンポ)というらしい。

高雄は要塞地なので、写真は一切撮れず、大次郎が準備した写真屋は駄目になった。私は、欧文化字と手フット機、それから用紙をしこたま持ってきた。名刺や簡単なものの印刷屋をやるつもりであったが、この町の様子ではとても商売にならない。台北で高田から紹介された台湾日々の大坪記者の家が私の家のすぐ近くであるとわかった。エスペランチストだと自己紹介すると、

高雄税関長の富田嘉明氏もエスペランチストだと言う。その縁故で、すぐ囑託として構内電話交換設備係りに採用されることになった。娘はミシンを買って洋裁屋を始めた。写真屋をやめた大次郎は、高雄貿易実務養成所に入學、州費でタイプ、英語、スペイン語、中国語、インドネシア語の教育を受け始めた。

生活のあてはほとんどはずれたが、山鹿にとって高雄は大いに気に入った。赤道に近くて昼間は暑い、夜は風が吹いて涼しい。物価は安くて、米は二期作、おかずいらすと云われるほど美味である。魚も豊富で、バナナ、パイも東京の十分の一ほどの値で、人情も厚かった。

上海の張維賢

東京を立つ時、山鹿は上海へ用件をもってきた。それは、興信所が毎年発行している興信録の申し込みを上海で集める仕事で、それに載っている大会社や商店を歴訪して、ただ印をとればよいのである。その手数料が稼げる上に、上海に在住の中国同志がどうなっているかを調べることができる。商用ということなので上海行きも容易、という一石三鳥の狙いであった。

——税関を一ヶ月程休んで、上海旅行の許可をとった。警察にはまだツケがまわっていないようですぐ下りた。上海は日本軍が占領中で、日本兵が剣つき鉄砲で立哨しており、特に橋は警戒厳重で、敬礼しなければ通れない。街はいたるところ戦鬪で破壊され、捜し当てた同志の家も跡形もなかった。旧知の中国同志は、みんな奥地へ去るか、行方を隠してしまい、誰一人とも出会うことができなかった。

本屋には、もう社会主義やアナキズム関係のものは一冊も見当たらない。また日本人とみると華人は口も聞かない有様であった。あまりの変貌に茫然としながら、上海埠頭の近くを歩いてみると、背後から突然呼び止められた。振り返ると、それは東京で出会ったことのある張維賢であった。

張は台湾の出身で、一九三二年に日本へ渡って山鹿を訪ね、自連の事務所へも出入りした青年であった。しかしそのことから、すぐ彼の身辺にも警察の眼が光り始め、数ヶ月後彼は再び台北へと帰った。彼とはその時以来の久方の対面であった。帰国後の張は、台北へ帰って劇団を組織したり、写真屋をやったりしていたが、日本軍の大陸侵略を座視できず、一年ほど前から上海へと渡って来て、上海のクリークで物資を運搬するジャンクの組合を作り、秘かに機会を待っていたのであった。

山鹿に偶然に出合ったその一週間前、彼は重大な情報をキャッチしていた。埠頭の立入禁止になった倉庫二棟にびっしり詰っているのは、日本陸軍が集積した阿片で、それが近日中に各地へ向けて移動されるというのである。その阿片は各方面軍の作戦と呼応して中国全土にばらまかれる一方、膨大な軍資金となって、ますます戦火をおおることは明らかであった。それ故、もしそれを阻止できたら、恐らく軍の工作は大きな破綻をきたすだろう。それ以上に巨大な軍資金のもとを画餅に帰させることができる。そのために、すでに数人の同志と綿密な計画が練られ、決行の準備が整っているというのであった。

二日後の未明、「火事だ！」という声に飛び起きた山鹿は、埠頭方向の空が真っ赤に焼けているのを見て駆けつけたが、軍はいち早くその辺り全域の交通を遮断し、現場付近に近寄ることすらできな

かった。周辺を行き交う軍の周章狼狽ぶりには異常なものがあつた。その後も嚴重な報導管制がひかれ、軍は事態の隠蔽に必死であつた。放火犯の捜査追求も、公然化するのを恐れてか、何時しかうやむやになつたようであつた。張たちのその後は、杳として知れなかつたが、山鹿は彼らの壮挙に心からの喝采を送りながら、高雄への帰途についた。

台湾単式印刷会社

——高雄から台北までは汽車で丸一日かかったが、税関の出張という名目でたびたび往来して、台湾の同志一波、吳桐生、連温郷などと交流した。しかし行くたびに台北やその他の町にも日本兵の姿が増え、軍部の南進の気配がいよいよ濃厚になってくるのが読み取れた。

私は、東京の単式印刷本社に何度か連絡して、台湾単式印刷会社を作らせる話に成功した。三〇万円の金で台北の甘芳オフセットを職人一〇人共ども買収し、そこで仕事をやり始めた。台北に南方協会という半官半民の機関が出来て、そこからの注文がほとんどであつた。これは軍のスパイ機関のようなもので、南方各地の戦略用地図を刷るのである。欧文が印刷できるところは他にあまりなく、単式の写真を使ってでなければ容易にできないから、値段はポリ放題。コストが安くあがるのと合わせて、一、二ヶ月でもとがとれる程の大繁昌であつた。私は台北に泊まり込み時々高雄へ帰る生活をしながら、やがて台湾が戦場になると覚悟した。そして何とかフィリッピンへと逃げる算段を考えはじめた。

フィリッピン上陸

——一九四一年（昭和一六年）一月、台湾軍は私を徴用した。私は高雄の家は戦火でなくなるものと考え、妻子と将来を打ち合わせた。長男大次郎が来秋貿易実務養成所を出るので、その時みんな南洋へ行くことにした。その時には必ず私も帰ってくる覚悟であった。

高雄港から行き先未定で乗船させられ、澎湖島の平たい小島の間に停船していると、輸送船が続々集まって来て、五〇隻ばかりになった。やがてラジオで真珠湾攻撃を知った。一月二三日、船団は駆逐艦に両側を守られて動きだした。船内では「昆明作戦」と称していたが、私には何処へ行くかはもうはっきりわかっていた。私が脱出しようと願ったフィリッピンへ軍属として連れられていくのは皮肉な運命だった。暗夜、島影が見え、マストの発光信号がせわしくなり、やがて、黒い陸影からも発光信号が見えるところまで来ると停船した。夜が明けると、東海岸の椰子の並木からルソン島リンガエン湾と知れた。

敵前上陸が始まった。水際は近くて、岸から二〇メートル程離れた水中へ入っても浅い。上陸すると、サトウキビ畑、その向うに街が見える。道には壊れた自動車やタンクが転がっている。血をふいた死体が転がり、兵隊の食品や装備が散乱していた。村人は一人も見えない。

翌朝、マニラに車を走らせるよう命じられ、えんこしている車の中からよいのを選び、地図を頼りにヌエバエシア、ガバナツアンなどの町を通った。敵影はどこにもなく、ただ燃えている町をつつ走った。

マニラのエスペランチスト

——そのうちに「マニラは平和開城した」と伝わってきた。やれやれ助かった。それなら私が希望していたフレイレとの再会もできるかもしれない。あれからもう三二年たったが、無事生きていたら会える。マニラで私に割り当てられた宿舎には電話が通じていたので、浅井恵倫の旧友マクリニヤーナに電話をかけてみたら直ぐに出た。「私はあなたが知っている日本のアサイの友人でいま日本から来たヤマガです。しかし私は戦争に来たのではない」と言うと、喜んで訪ねて来てくれとの返事だった。マニラ開城の日に、こうして私は「平和の第一声」を取り交わした。

ポルトガル領事館へ行ってフレイレのことを尋ねると、数年前死んだが未亡人がパコ街にいとわかった。早速訪ねて行くと、「日本のヤマガの名は覚えている。ちょっと待て」と言っ取り出してきた手紙と絵はがきの束は、何と三二年前私が出したもののばかり、私ははからずも、遠い異国で若い頃の私に再会した思いで、感無量だった。フレイレの子孫は今百余人になり、みんな近所に住んでいる。近日集まるから是非来てくれと言われ、それ以来、その百余人との親類付き合いが始まったのであった。一方、マクリニヤーナはスペイン系の混血で、エス語はともうまく、民事裁判官の兄も達者な発音だった。そして、彼女の友人のエスペランチスト、ヴェルンサ教授、カステイロ博士、貧民窟に住んでいるカバンギスなどに紹介された。カバンギスは庶民的で私と気が合った。またロドリゲス・ヴェルンサ教授には、一年もかかって刊行した『日比小辞典』で大きな助力をうけた。

間もなく息子の大次郎が徴用されてマニラ来た時、私はフレイレ未亡人のパーティーへ連れて行った。若い男女が入り乱れてのダンスの席で、大次郎の囲りに色白のメスチーサ(混血)が集まってきて無遠慮に、ハンサム、と大声でほめそやすので、軍服姿の大次郎は泣き出しそうになっていた。

日比小辞典の刊行

私の勤務は敵産管理委員会であった。埠頭にあるヘルボーン印刷会社の倉庫へ行ってみると、まだ不発弾が燃えて煙をあげている。二町四方ほどの大倉庫の中には、上質用紙がギッシリ詰まっていた、新聞用巻き取りザラ紙は林のように並んでいた。高級レター紙、証券用ボンド紙など、見たこともない紙が出口もわからぬほど積んである。私は敵産管理の役目で、それらを封印したが兵隊が翌日から押しかけて、片っ端から持ち出し、もののひと月とたたぬうちに空っぽになった。

マニラ最大の活版印刷所はアメリカ資本のフィリップス教育会社で、最新式印刷機が十数台、ライノタイプ、モノタイプなどが広い工場に一ぱいで、二階には文具のストックがぎっしり詰まっている。そこへ中国人印刷所から買収した漢字活字を運び込んで、新聞を発行することになり、マニラ新聞社が設立された。

私は軍の指令でマニラ新聞社へ配置され、二ヶ月程で軍属を解かれることになった。しかし、比島の印刷は軍に管理されることになったので、私などの割りこむ余地はなかった。そこで私はか

ねて計画の日比辞典出版の仕事始めた。

マニラにはタガログ語の字引きが一冊も見当たらなかった。私は自分の必要でそれをノート風に作っていた。それを発展させいっそのこと字引きを作ったらと考え、漢字の読める中国人印刷工を一人雇った。新聞紙の五号活字とライノタイプで打ったタガログ語の清刷りを、切って糊で貼り、それを写真に撮る原紙作りは、単式印刷で腕に覚えの仕事である。エスペラントで知己となつたヴェルソサ博士が校訂を受け持ってくれた。私の片手間仕事なので少々時間はかかったが、四三年一月末には本文二三四頁、付録の文法その他四八頁、ポケット型8×14センチ、クロス表紙で定価三ペソで発売の運びとなった。リサール街やエスコルタの書店に委託販売させたが、たちまち再版再々版で、飛ぶように売れた。

大次郎との永別

一九四三年九月、長男の大次郎は貿易実務養成所を卒業した途端、陸軍筆生として徴用され、そして軍政部通訳として奇しくも山鹿のいるマニラへ送られてきた。それから約一年間、はからずも山鹿親子は、用件があれば電話をかけて会うという日々を送るようになった。

毎日曜に大次郎は必ず遊びにやってくる。山鹿の仕事などを手伝った。軍服をきて剣をさげている大次郎を、比島人たちは山鹿よりえらいように思っけて敬礼するのが、嬉しくもあり、少々シャクでもあった。

昭和農産のデルカルメン製糖所にも、私の設計で製紙工場を作ることになった。そこは自動

車でバターン半島の方へ三時間ほど走り、サンフェルナンドから砂糖きび畑の中を一時間も北へ入った所で、私は会社の独身宿舎に暮し始めた。

そんなある日、マニラから米を三〇俵と工員たちを載せ、トラックでハイウエーを突っ走っていた時、ドッカーンと大ショックを受けて気を失ってしまった。

気付くと私は車の外の草地に投げ出されて、全身打撲で立てず、同乗者もみんな重傷、運転手もガラスの破片で血みどろである。相手は、製糖所から飛行機燃料ブタノールを積んできたタンクトラックであった。マニラへ運ばれ入院した私は、ギブスで左脚を固め、松葉杖を二ヶ月もつく始末だった。絶えず大次郎は見舞いにやって来たが、私の寝込んでいるうちに南方前線の形勢がみるみる悪くなったらしかった。マニラ市内の雰囲気も一変して、灯火管制と退避演習が始まり、民間邦人にも軍事教練が始まったということだった。

私は大次郎と打ち合わせ、戦火が近づいたら、デルカルメンからさらに比島人の世話で山中に逃げて暮らす方針をたてた。

一九四四年八月末、台北の単式印刷から、電報で「カイシャツブレルカエレ」と言ってきた。足は直ったが持病の痔はひどく、こちらでは直る見込みがないので、一端私は台湾へもどる気になった。電報を軍政部の航空係へ見せると、あっさり台北までの飛行機の席がとれた。私は万一のときの用意に、親交のあった黄光船に金を預け、また後を引き受けたと言ってくれる比島人にくれぐれも大次郎を頼んだ。ところが、一九才の大次郎にも現地徴兵の令状が来た。一〇月一日入営と決まっては、もうどうにもならなかった。九月二一日、私は大次郎や比島人の知己の見送

りを受けて、クラークフィールド飛行場から飛び立った。窓外に大次郎のふる手の白い手袋が何時までも揺れていた。ルソンの山々を見下ろし、バシー海峡の島々に綿のからむような白雲が浮いている。私は死別にまさる親子生別の悲痛を、じっとかみしめた。台湾に近づくとカーテンがおろされて外は何もみえなくなり、やがて台北に着陸した。その日マニラがはじめて空襲をうけたと報道された。私の飛行機はその一時間前に出発したのであり、まさに間一髪の差であった。

その後、大次郎からは桜兵営に入隊、通信隊にはいったと連絡が来た。が、一九四五年六月二〇日、山岳地方バギオの奥ギアンガンで部隊の全滅と共に戦死したとの公報があった。おそらく強行軍で、逃亡する力を失って倒れたのだと思う。

台湾自由社など

台湾に帰ってみると一層状況が悪化しているのがよくわかった。台湾単式印刷は東京から全判オフセットを送らせたが、途中潜水艦にやられて届かず、空襲もいよいよ激しくなって仕事どころではない上に、注文もなくなり、お手上げ寸前であった。

会社のことに構ってはおれぬと高雄へ帰ってみると、家族は無事だった。しかし、連日連夜の空襲で港の周辺は焼野原になり、ねずみ一匹生きられそうにもない。山鹿の家の近所も兵隊が野営し、狙われはじめて危険は迫っていた。十数年来の同志でエスペランチストの連温郷が疎開先として、台中州員林の竹やぶの中に住む張厚一家を紹介してくれた。

——そこは大家族共産制をとって農耕をしている小部落である。連温郷は、ヤマガは日本人だが

決して日本臭狗ではない」といって、一族のコの字形に建てた一軒の空いている部屋に入ることになった。太い竹を組み合わせ泥を塗った家である。長女アイノの友人張寿賢がその近くに疎開して、時々遊びに来た。家族同様日本風の風呂桶で風呂に入ったり、食事をしたりした。ところが、彼女が本島人だと知れると大騒ぎになって、村中がみんな見に来る。本島人が日本人の家で飯を食べ、風呂まで一緒に入ったという話は聞いたことがない、と老人などは涙を流して喜ぶ。それから一層みんなと親しくなった。

連は新竹の中坵でモミガラ灰工場をやっていたので、よく泊まりこみで遊びに行った。ある時「台湾人にコン泥が多いらしいが何故か」と聞いてみた。「ここでは大家族生活で農具など殆どものは共同で使用する。食物も融通し合って共產主義的である。タバコを一本下さいと言う代わりに、持っていれば黙って吸う方が親しみを感じる。だから台湾人は、自分が入用なら、誰のものか分からなくても、無断で取って使う。その持主が日本人だと、ここにあったので使いましたと言いわけをしても、「泥棒だ警察へ来い」となるのだ。台湾人は、夜があげたら労働する。床を出たらそのまま裸足になって仕事にかかる。日没になると、一家一村みんな足を洗ってその時はじめて履物をはく。だから、朝からゲタをはいているような日本人は、怠け者でプロレタリアの仲間ではない。このように、万人労働と相互扶助が本能的習慣になっているところへ、ケチな大和魂を持ち込んだって、調和する筈がないことは君も分かるだろう」と言った。

八月一日、日本は降伏し敗戦となった。引き揚げに狂奔する人達を尻目に山鹿は灰燼になった高雄へと戻った。家は偶然にも焼け残っていた。彼の一家は、敗戦如何にかかわらず高雄に留まるつも

りであった。それにしても、まず食べる費用をかせがねばならなかった。

とりあえず「台湾自由社」の看板を出し、北京語、英語、エスペラント語教授の塾を開いた。間もなく国府軍が進駐してきて、中国語がたちまち必要になってきた。「血統は争えぬもので、台湾人青年が覚えることの速いには驚ろいた。こちらは久しくやらなかった北京語なので、毎日教材を作るのに頭痛ハチマキで、指先がすりむけるほどガリ切りに忙殺された」——状態であったが、しかしともと貧乏な台湾青年たちが、満月に月謝が払える筈もなく、悪戦苦闘半年たらずで売り喰いも底を尽き、とうとう引き揚げることにした。

——お蔭で、最後の引き揚船に、リュックにつめる品物もなく軽々と乗り込んだ。多年集めたエスペラント文献は、全部、同志連温郷に引き渡した。こうして四六年四月九日、妻と娘と私はリュック一つずつを背負って、広島県大竹港に上陸、翌日京都の兄のところへと辿り着いたのであった。